

コーヒーブレイク

## 函館の外洋帆走ヨット

犬伏 健

Takeshi Inubushi



2001年11月に函館どつく(株)函館造船所に出向を命ぜられ、2012年12月まで約11年間の函館での生活で感じたこと、特に“外洋帆走ヨット”の一端を紹介します。

函館は日本でも有数の魅力的で刺激的な街の一つです。伊万里の「いなか」暮らしに慣れきっていたからだに中核市の程よい文化的な生活を味あわせてくれました。これは一人で楽しむには勿体ないと思い、半年後に妻を呼び寄せることにしました。同時に、“フーテンの寅”を自認していた長男を急遽伊万里に呼び寄せ、一年ばかり前に建てたばかりの新居の管理を任せることにしました。

小生は四国の「阿波」で生を受け、本土の「浪速」で職に就き、最後は九州の「伊万里」で骨を埋めるのかと思っていたら、図らずも北海道の「函館」で住むことになったのです。四島全部に住んでみて、やはり“函館”が一番住みよかつたかな“と思うこの頃です。

### 1. 函館の気候に大きな影響を与える「津軽海峡」

津軽海峡は函館の気候に大きな影響を与えています。

およそ八千年前、日本海に暖流が生まれたといえます。九州と朝鮮半島の間が大きく開いたことによって日本海に暖流が流れ込むこととなります。フィリピン沖に発生し、太平洋を北上する暖流・黒潮は沖縄付近で二つに分かれ、一方はそのまま太平洋を進み、もう一方が東シナ海を北上して対馬海峡を通り、日本海に達します。これが対馬暖流です。日本列島は太平洋に黒潮、日本海に対馬暖流と言う二つの暖流に挟まれ、海の影響を大きく受ける環境へと変化しました。日本列島ならではの豊かな森の王国・温暖・湿潤な水の豊富な風土が生まれることになりました。

零下何十度という猛烈なシベリア寒気団にも拘らず、北海道の中でも函館が比較的暖かいのは、津軽海峡を通過する暖流のおかげです。

第1図に日本列島を囲む海流を示しますが、潮の干満にかかわらず、津軽海峡は常に東流のみです。

日本海に流れ込んだ対馬暖流の多くは津軽海峡から太平洋へ流出し(津軽暖流)、残りは北海道沿いに北上し宗谷海峡オホーツク海に抜けます。

函館の雪は粉雪です。東北・北陸地方のような湿度の高い重たい“どか”雪と違って吹けば飛ばさないいわゆる Powder Snow です。これは津軽暖流が函館の南側を流れているからです。



第1図 日本沿岸の海流・概念図<sup>1)</sup>

## 2. 津軽海峡における「外洋帆走ヨット」レースの紹介

さて、本題に帰って函館で「外洋帆走ヨット」の生活を楽しもうと、「北海道外洋帆走協会」(通称“外帆”)に所属する「ペガサスヨットクラブ」(会員数10名)PEGASUSVII(グランドソレイユ37)に加入させていただきました。

“外帆”のメンバーは(2012年現在)43艇(49フィート~21フィート)で盛んにヨットの生活を愉しんでいます。函館のシーズンは短く、5月のゴールデンウィークに一斉に上架して船艇塗料を塗り11月中旬には冬支度(雪が積もっても支障のないように)をします。ことほど左様に函館のヨットシーズンは短いのです。伊万里であれば一年中動かせるのに!

津軽海峡におけるヨットレースは、前述の津軽海峡に流れ込む東流と風を読みこなすことがポイントとなります。すなわち、風のある間にいかに津軽海峡を横断してしまうかですが、最も狭いところ(第2図に示す青森側の大間港と北海道側の汐首岬間で約10マイル)で最大東流7ノットをどう横切るかということになります。風がなくなれば、そのまま太平洋に流されて帰って来れなくなってしまいます。(今は機走すれば帰れますが)



第2図 津軽海峡の地図

1) 津軽海峡横断ヨットレース

昭和31年7月16日、北海道大学水産学部ヨット部7名が初めてヨットによる津軽海峡横断が成功しました。

前日15日に函館港を出帆し、約30マイル西側まで遡って同日朝3時に松前郡福島港を出帆、同日午後5時半対岸の青森県平舘に到着しました。

当時の帆走常識では、函館から陸奥湾に向けて直接進路を取れば、津軽海峡を流れる対馬暖流により太平洋に流されて帰って来られないと言う定説がセーラーたちを支配していました。

使用した“ユージェント号”はホンコン製の18フィートのスloopで当時函館水域では一番大きなヨットでした。エンジンの備えはなく2本の長いオールで漕いで進むのです。今のようにGPSなどない時代に、頼れるのは携帯ラジオ、コンパスおよび六分儀くらいでした。

津軽海峡におけるヨットレースを次に紹介します。

第1回「津軽海峡横断ヨットレース」が始まったのは北大生が津軽海峡の横断に初めて成功してから19年後の昭和50年になってからでした。その後コースや開催時期の変更等紆余曲折（コース：青森側の漁港を大間漁港→佐井漁港に、開催時期：5月→10月）がありましたが現在の実施要領は例えば36回の大会を例にあげると次のようになっています。また、私が参加した第32回のレース結果と、函館山をバックに帆走する吾らがペガサスの風景です。

第1表 第36回サンカリフォルニアカップ津軽海峡横断ヨットレース内容

大会名	第36回「サンカリフォルニアカップ津軽海峡横断ヨットレース」
開催日	2013年10月13日
コース	函館 函館漁港 →青森 佐井漁港
スタート時間	8:00
タイムリミット	16:00 (8時間)
距離	23マイル

第2表 第32回サンカリフォルニアカップ津軽海峡横断レース結果<sup>2)</sup>

スタート時刻		距離								
8時30分00秒		23								
エントリーNo.	艇名	艇種	レーティング	フリート	フィニッシュ時刻	所要時間(秒)	修正時間(秒)	着順	修正順位	
1	天快	X-119	592.1	青森	15時13分20秒	24200	10581.7	9	12	
2	D-Bros	YOKOYAMA 33	683.7	函館	14時08分42秒	20322	4596.9	6	3	
3	マサシZ	YAMAHA 31EX	685.6	函館				DNF	15	
4	NYX	YAMAHAR 34II	664	函館	15時19分22秒	24562	9290	10	9	
5	速鳥	YAMAHA 30S	691	函館	16時18分29秒	28109	12216	13	13	
6	けんよし	DEHLER 34	638.6	青森	14時52分49秒	22969	8281.2	8	8	
7	クロコダイルダンディ	ELIOTTE 10-5	627.1	函館	13時20分47秒	17987	3563.7	2	2	
8	PEGASUS-VII	GRAND SOLEIL 37	722.6	函館	14時51分50秒	22910	6290.2	7	7	
9	貴帆	X-37	605.3	大湊	13時17分56秒	17276	3354.1	1	1	
10	Snotty	YAMAHA 33S	606.1	青森	14時05分52秒	20152	6211.7	5	6	
11	サムライVII	JEANNEAU 35 O/D	621.2	函館	13時47分30秒	19050	4762.4	4	4	
12	AT-YOU	YAMAHAR 34	680	函館	16時25分19秒	28519	12879	14	14	
13	チャンピオン	BENETEAU 1t	605.4	函館	13時44分12秒	18852	4927.8	3	5	
14	ギャロッパー	BENETEAU OCEANIS40	677.7	函館	15時37分45秒	25665	10077.9	12	11	
15	Big Boy	YAMAHA 34S	670	函館	15時27分49秒	25069	9659	11	10	



写真1 第32回サンカリフォルニアカップ津軽海峡横断レース風景（中央黄色い上着が筆者）

## 2) 青函カップヨットレース

青函トンネルの構想は戦時中計画され、昭和21年調査が始まりましたが、昭和29年の日本海難史上最大の惨事となった洞爺丸事故（死者・行方不明者合わせて1155人）によって構想の早期実現が叫ばれ、そして昭和39年着工にこぎつけ、24年後の昭和63年の完成になりました。

青函カップヨットレースは昭和63年に開通した「青函トンネル」の開通記念に始まったレースで青森－函館間の56マイル（凡そ津軽海峡部分26マイル、平館海峡+青森湾30マイル）で北日本最大の外洋レースです。

小生は函館スタート、青森スタートそれぞれ2回のレースに参加しましたが、タイムリミット25時間が示す通り「横断レース」23マイル（タイムリミット8時間）に比してタイムリミットが長い訳です。

これは第2図の平館海峡と青森湾があわせて約30マイルあり比較的風の吹かない潮の流れのないゾーンがあるからです。事実（函館スタートの1回はDNF（Don't Finish）に引っかかりました。風がなくなって、潮もなくその場でじっと何時間もただ風が吹くのを待つばかりだったのです。

第3表 第20回青函カップヨットレース内容

開催日	2007年7月28日
コース	函館（函館漁港）⇒ 青森（福島港）
スタート時間	10時
タイムリミット	25時間
参加艇	35艇
フリート	ロシア（毎年サハリンから参加）・函館・青森・小樽・柏崎・大湊・岩手・野辺地

3) その他のポイントレース

その他にポイントレースとして以下のレースが短いシーズン中に開催されています。3レース以上の参加艇で年間の総合ポイントの成績で表彰をします。2009年には吾らがペガサスは年間優勝を果たしました。

- ・オープニングレガッタ(6月)
- ・函館湾オープンヨットレース(7月)
- ・花びしホテルカップ (9月)
- ・納会レース(10月)

第4表 2009年 年間総合ポイント結果<sup>2)</sup>

		2009 年間総合ポイント												
艇名	艇種	オープニングレガッタ 2009.6.14			函館湾オープンヨットレース 2009.6.28		花びしホテルカップ 2008.9.21		納会レース 2009.10.25			年間総合成績		
		第1R	第2R	順位			着順	順位	第1R	第2R	順位	ポイント	順位	
サムライⅧ	ジャー-350/D						1	2						
速鳥	ヤマハ30S	6	6	6			6	5	2	3	2	13	2	
チャントオン	ヘネウクワン						5	7	4	2	3			
PEGASUS VII	グラントリイコ37	1	1	1			7	4	1	1	1	6		
BIG BOY III	ヤマハ34S													
カナイⅡ	ヤマハ28S						10	9						
勸進丸	アルビノパラト30								6	6	6			
NANA	YA-30SⅡ	2	2	2										
ニックス	ヤマハ34Ⅱ						9	10						
D-Bros	ヨコヤマ33RC						3	1						
キナンボ	ヒーターソソ30						13	13						
マイウェイ	ミラヘル375								3	4	4			
クロコダイルダンディ	エリオット10.5													
AT-YOU	ヤマハR34	3	3	3			4	6						
Coccolith	デュホア30	5	5	5			8	8	5	5	5	16	3	
マリンヒリアⅡ	YA-23	4	4	4										
GALLOPER	ヘネウオセアニス40						12	12						
DOLCH	ヤマハ30S						11	11						
SNOTTY	ヤマハ33S						2	3						
参加艇数		6 艇				中止		13 艇		6 艇				

4) 函館開港150周年記念

2009年は函館開港150周年に当たり各分野でさまざまな行事が行われましたが、外洋帆走ヨットの世界でも例外ではなく、一例として、多くの市民に外洋帆走ヨットを楽しんでもらえるように市民試乗会を催しました。吾らが「PEGASUS VII」にも多くの市民が分乗しました。



写真2 “PEGASUS VII” に分乗した市民<sup>2)</sup>

### 3. 函館の外洋帆走ヨットの思い出

このように短い夏を謳歌するように函館では盛んにヨットレースが開催されており、ペガサスヨットクラブの一員として小生も多に参加させていただきました。

一番の思い出はなんと言っても「青函レース」の青森スタートの時の津軽海峡を横断する時の辛さです。ちょうど10時にスタートすれば、風の吹かない「青森湾」と「平館海峡」をやっとの思いで通り過ぎたら大抵は夜中になっています。今度は風の強い、(約10m/s内外)中で波しぶきをかぶりながら明け方まで戦わなければなりません。7月中旬とは言え北海道の夏はとても寒いのです。最近流行の防寒着を着て下着を着こんで、リーフ(縮帆)しても波しぶきをかぶります。ペガサスは“ドジャー”(レース仕様ヨットはこんなものはないがクルージングタイプのヨット故これが着いています。オーナーの心使いでしょうか?)が着いているのでそれでも随分助かりましたが。

それにもう一つ、海峡を往復する大型船に気を遣わなくてはなりません。「動力船は帆船を避けなければならない」と言う「海上衝突予防法」の国際的な規則はありますが、これとて先方が見張りを見落とせば何の役にもたちません。一瞬のうちに“魚の餌”にならんとも限りません。事実最近でも見張りを怠った大型船と漁船の事故がありました。この航路は仁川(韓国)、上海と北米の航路になっています。特に最近は大型コンテナ船が頻繁に航行しています。そんな訳で大型船が近づいてくると、セールを懐中電灯で照らしてこちらの位置を示しました。そうこうしているうちに、フィニッシュラインが近づいてきました。ゴール時の疲労感と安堵感と達成感!仲間たちと一緒に迎えるゴールはなにものにも代えがたいものがあります。

私ごとで恐縮ですが、2008年5月に脳梗塞を患い、病院の関係で函館に永住しようかと考えましたが、4年経って病状も進展しなく、「九州地区にもいい医者がいるよ」と言う主治医の言葉に押されて、2012年12月に伊万里に帰ってきました。幸いその後も病状は悪化していないようです。

#### 参考文献

- 1) Ship&Ocean Newsletter 第80号「さかさ地図の発想と日本海学」  
(海洋政策研究財団) [https://www.sof.or.jp/jp/news/51-100/80\\_3.php](https://www.sof.or.jp/jp/news/51-100/80_3.php)
- 2) 南北海道外洋帆走協会 会報

執筆して頂きました大伏氏の株式会社名村造船所における概略の経歴についてご紹介します。

昭和41年	4月	株式会社名村造船所入社
昭和61年	2月	設計部 船装設計グループリーダー
昭和61年	6月	設計部 艀装設計グループリーダー
平成4年	4月	船舶海洋事業部 設計部副部長 兼 艀装設計グループリーダー
平成6年	6月	船舶海洋事業部 設計部長 兼 艀装設計グループリーダー
平成6年	7月	船舶海洋事業部 設計部長
平成9年	7月	船舶海洋事業部長補佐 兼 設計部長
平成10年	10月	船舶海洋事業部長補佐 兼 設計部長 兼 名村エンジニアリング株式会社 出向
平成11年	7月	経營業務本部長補佐 WIN21 推進部長 兼 名村エンジニアリング株式会社 出向
平成12年	8月	伊万里事業所長代理 兼 環境・安全衛生推進部長
平成13年	11月	出向 函館どつく株式会社
平成15年	7月	函館どつく株式会社 転籍 株式会社名村造船所顧問(兼務)